

Title	<図書紹介>デザイン史フォーラム（編）（藤田治彦責任編集）『近代工芸運動とデザイン史 Modern Craft and Design Movements』
Author(s)	大久保, 恭子
Citation	デザイン理論. 2009, 54, p. 68-69
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53367">https://doi.org/10.18910/53367</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## デザイン史フォーラム（編）（藤田治彦責任編集）

『近代工芸運動とデザイン史 — Modern Craft and Design Movements』

思文閣出版 2008年

大久保恭子／関西外国語大学

本書は「近代」と「工芸」をキーワードに、総勢二十一名の研究者による多角的な視点で、二十世紀前半の「デザイン史」をとらえた書物である。

「デザイン史」と書名にはあるが、本書は、ミメティックな表象から抽象的表象へと進化発展するモダニズム美術史観とは一線を画している。編者である藤田治彦氏が巻頭序文で明確にしたように、本書はむしろ、「デザイン」という二十世紀半ばによく浸透した言葉に包括されたことで、見落とされてしまった事象とその背後にあって現象に意味を与えていた環境的あるいは制度的特質とをすくいあげようとするものである。

この試みは歴史を振り返るとき生じがちな思いこみに注意を喚起するものでもある。なぜなら、「デザイン」という言葉が共有されていなかった時代のさまざまな芸術運動にかかわった人々は、「デザイン」という概念的枠組みで活動していたわけではなかったからである。歴史を遡及的に見ることは、その時代を現在進行形で生きた人々の息づかいや目線を、21世紀の現時点の枠組みに有無を言わず引き寄せてしまうことにつながりかねない。これを回避して、当時何が問題視されたのか、何が起こったのか、そして何が変わったのかを問うには、歴史を逆なでにするのではなく、その時代に寄り添う姿勢が求められる。本書に通底する第一の特徴は、この視点である。

もうひとつ、本書の大きな特徴は横断性である。書名にあがった言葉から誰もが連想する国に限定して論じるのではなく、より広い

地域を射程に入れている。第一部はヨーロッパを取り上げているが、そこにはイギリスはもちろん、ベルギー、フランス、イタリア、スイス、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、北欧とほぼヨーロッパ全域に関する論考が収められている。第二部は欧米とアジアを取り上げ、アメリカ合衆国、日本、韓国、台湾、インドに関して論じられている。

第一部の冒頭にはイギリス関連の論文が並ぶ。藤田氏はラファエル前派からアーツ・アンド・クラフツ運動への推移を、単線の経緯としてではなく、錯綜し相互に関わりを持ちながら変容してゆく動態としてとらえた。つづく川端康雄氏はその時期の思潮をラスキンに基づいて読み解き、鶴岡真弓氏はケルト文化の地域性と普遍的価値との関連を巨視的に論じ、要真理子氏はオメガ工房が有した歴史的架橋性を制作実態と理念の両面からとらえた。ベルギーに関して高木陽子氏はアール・ヌーヴォーに至る過程を教育と美術館制度との関わりで立論した。フランスについては西村美香氏、今井美樹氏、川上比奈子氏が世紀の転換期から両大戦間期までの近代工芸運動を時系列に沿いつつ、個々の時代と運動実態に密着して論じた。イタリアについては末永航氏が、スイスについては川北健雄氏がそれぞれの国情と他のヨーロッパ諸国との影響関係とを踏まえて考察した。ドイツに関しては三編の論文が収められ、池田祐子氏は十九世紀における工芸博物館の存在意義を、時代の要請を踏まえながら展示・教育・研究の視点から分析した。針貝綾氏は、ドイツ工作連盟設立の必然性を社会的背景から明らかにした。

田所辰之助氏は世紀初頭の工芸学校における理念と変革を教育制度との関連で論じた。世紀転換期のオーストリアについて天貝義教氏は、応用美術新興運動の一環として位置づけられた近代工芸運動が担った思想をつまびらかにした。井口壽乃氏はハンガリーのアーツ・アンド・クラフツ運動の意義を地域性と国際性とが交差するところに見た。塚田耕一氏は北欧五カ国に共通する特質を手工艺的な性格に見つつ、同時にそれが近代科学と共存する現状に独自性を見いだした。

第二部ではアジアに関する論考が収められているが、ここではアジアを内側から見るのみならず、アジアと欧米との相互影響関係という視点も取り込まれている。それは藤田氏の、フランク・ロイド・ライトのアメリカ合衆国での活動と、ライトを通じたヨーロッパやアメリカの動向の日本による受容についての論考に明示されている。前崎信也氏は、イギリスの陶芸における伝統と科学技術の協調と、日本でのそれとを、両国につながりを持った松林鶴之助の活動を通して論じた。つづいて藤田氏は、柳宋悦が率いた「民藝」と山本鼎が中心となった「農民美術」運動との関わりが戦前の日本で持ち得た意義を明らかにした。それを受けて猪谷聡氏は、民芸運動の刷新という自家撞着的活動に関与した吉田璋也によるプロデュースの独自性を考察した。柳と韓国の陶磁との関わりについて竹中均氏は、日本側と韓国側、双方の視点から相対的にとらえ直した。林承緯氏は台湾における民芸運動の受容を柳と顔水龍とを比較しつつ論じた。最後の論考は上羽陽子氏による現代インドの手工芸に関するもので、ラバーリーの刺繍への外部評価に対する、制作中止という彼らの選択の独自性と戦略とを、歴史的背景を踏まえて読み解いた。

以上が本書の概要であるが、以下に評者が

共感を抱いた点と「願わくは」と感じた点とを挙げておきたい。

まず、歴史的過去の事象を検討する際に見られる、その時点に寄り添おうとする全編に共通する姿勢は、普遍的前提に漠たる疑念を抱く者のひとりとして深く共鳴するところであった。「デザイン」ではなく「近代工芸運動」という、当時有効性を持っていた概念を浮かび上がらせ、それをめぐる多様な運動の歴史的意義を個々に検討に附した点は、重要だと思う。

また「近代工芸運動」を軸に、広範な地域での現象を多角的にとらえようとする視点、ことに第二部での一方通行ではない相互作用に着目する視点は、今日的な問題意識に根ざしていると言える。

そして総じて各論者は慎重に筆を進め、難解な言い回しやアクロバティックな解釈論の展開には距離を置いているように見受けられた。それは巻頭序文での編者の「従来、近代美術や近代建築に比べ近代デザインの教育に使用できる文献、とくに日本語文献は限られていた」「大学における研究の社会的還元が強く求められる現在、本書がその欠落を多少なりとも埋めることができれば幸いである」に込めるものであるのだろう。書物の趣旨が明確でこの点も好ましく思えた。

最後に、第一部の構成が緻密であるのに比して、編者も言及しているが、第二部の構成が粗いように思えた。何と言っても文化的土壌に共通項のあるヨーロッパに対して、アジアは一層多様であるのだから、それを対象に立論する困難さは想像に難くないが、編者のさらなる展開に期待したいと思う。